

和歌における「故郷」のディアレクティク

村尾誠一

はじめに

「故郷」は現代の日本語では「コキョー」と読まれる。「フルサト」と読んでもよいが、何れにしても生まれ育った土地であり、母胎に回帰するかのような懐かしさで捉えられる空間である。

古典語の場合、「コキョー」と読む場合もあるが、漢語としての意味と干渉してしまうであろう。「フルサト」という和語とは意味が異なる。ここで論じたいのは和語の方なので「ふるさと」と仮名で表記した方がよいだろう。他にも「古郷」「故里」「旧里」など漢字は様々に宛てられる。「ふる」は時間の経過により古くなり、さびれる様子である。「さと」は人が集まり住む所である。したがって、「ふるさと」とは、何かの理由で住んでいた人達が移住をしてしまい、さびれてしまった空間である。具体的にはかつて都があった場所、現代語では古都がそれに当たる。古語辞典による意味記述でも、「ふるさと」の第一義は古都・旧都ということになる。

しかし、古典語の用例を見て行くと、現代語の故郷に近い意味で解すべき例も見られる。古語辞典の意味記述でも、生まれ育った土地、昔馴染みの場所などとされ、第二義以下に記載さ

れる。さらに女房達が宮仕え先に対して自宅を謙称する例も挙げられることが多い。ほぼ現代語の故郷に近い意味も「ふるさと」は併せ持つていることになる。現代語への変化ということでは、むしろそちらの意味だけが残り、第一義は忘れられてしまっていると言えよう。

古都という空間をどのように捉えるか。現代の我々の認識といっても個人差も大きいと言えようか。故郷に似た忘れ去られた自分達の原像のようなものを残した懐かしい場所という捉え方もなされている。しかし古都は何らかの形で遙かに彼方の歴史、遠い自分達とは異なる世界を封印したような場所である。遙か彼方にある自分達の世界とは異なる空間への憧憬で捉えられる土地でもある。例えば、古都の代表である奈良に対して、和辻哲郎や会津八一といった近代古寺巡礼の先駆者達が、ギリシアという遙かな異国の土地と重ね合わせて憧憬の核を作り上げて行ったことは、彼等の作品からも直ちに知り得るであろう²。古都はそうした憧憬による「異境」であると言つてよい。

日本古典語「故郷」、「ふるさと」は、「異境」と「故郷」の二つの位相を併せ持つ語だとの言い方も許されるであろうか。それが弁証法的な関係を本当の意味で持ち得るかは覚疎ない

のだが、それに近い興味を喚起するのは確かであろう。その関心から「ふるさと」という日本古典語を考えてみるのが本稿の主題である³。

文学作品に限っても、「ふるさと」の語の使用される範囲は広い。論述を拡散させないためにも、和歌に範囲を絞っておこう。絞る以上は扱い慣れたジャンルにということでもあるが、古典語は、特に文学におけるそれは、和歌による表現がその基盤になっている故だからでもある。

一 遷都という体験 — 『万葉集』の「故郷」 —

「ふるさと」という古典語に、幼年時代を育んだ「故郷」と、歴史の彼方の「異境」である古都の意を併せ持つ理由は、弁証法的である以前に、極めて端的な事実に起因している。『万葉集』に遡るならば、その理由は明白だと言つてよいだろう。遷都という体験に拠っているのである。

卷一には次の歌がある⁴。

和銅三年庚戌の春二月、藤原京より寧楽宮に遷る時に、御輿を長屋の原に停めて、古都を廻望みて作らす歌

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えず
かもあらむ

和銅三年（七一〇年）は平城京への遷都の年である。時の天皇元明天皇の作として載せられる。藤原京から平城京までの遷都の道の丁度中間地点が長屋原である。そこに行列を停め旧都をふり返る。この歌については、旧都を離れる儀礼の中で歌われる作品と考える説をはじめ様々な議論があるが、素直に読み

取つて行つても遷都とはどのような体験であるかをよく語っている。「君があたり」は元明天皇の夫である草壁皇子の墓のあたりと考えられているが、遷都が国家のレベルでの体験であると共に、個人のレベルでも様々な記憶に関わる土地から離れる体験であることをよく示している。それが他ならぬ天皇の思ひとして収約されているのがこの歌である。

卷一では、このすぐ次に「或本、藤原京より寧楽京に遷る時の歌」として、民の立場の長歌を載せている。

大君の命かしこみにきびにし 家を置き こもりく
の 泊瀬の川に 舟浮けて 我が行く川の 川隈の
八十限おちず 万たび かへり見しつ 玉梓の 道行
き暮らし あをによし 奈良の京の 佐保川に い行き
至りて 我が寝たる 衣の上ゆ 朝月夜 さやかに見れ
ば たへのほに 夜の霜降り 石床と 川の氷凝り 寒
き夜を 息むことなく 通ひつつ 作る宮に 千代まで
に いませ大君よ 我も通はむ

反歌

あをによし奈良の宮には万代に我も通はむ忘ると思ふな
長歌の後半から反歌にかけて、新都においても帝に忠誠を尽くすという文脈に支配されて行く。しかし、「にきびきし」という、安心して慣れ親しむ様で形容される「家」を捨てて、おそらく家財一切を積んだ舟で、川の曲がり目ごとに「万たび」顧みずにはいられない故地を離れることが遷都であることに他ならない。だから、奈良の地の佐保川の川畔での仮寝を「石床と川の氷凝り」と表現するのも、ほとんど現代の故郷喪失者の思いとも重なるであろう。

言うまでもなく、遷都後の新都で、「ふるさと」の語で古都を振り返ることもなされる。巻六には坂上郎女の次の歌が載る。

大伴坂郎女の元興寺の里を詠ふ歌一首

古郷の飛鳥はあれどあをによし平城の明日香を見らくし
良しも

初句の原文表記は「古郷之」である。ちなみに『万葉集』で「ふるさと」が万葉仮名ではなく漢字表記される場合は「古郷」または「故郷」である。

坂上郎女の生年は未詳であるが、平城遷都以前の生であることは動かない。最も遅い生年推定は大宝元年（七〇一）であり、少女時代は藤原京のあった飛鳥の地で過ごしたことになる。「古郷の飛鳥はあれど」は、その地を懐かしむ表現であり、「古都である飛鳥は良いところだが」などと現代語訳される。いうまでもなくこの古都は少女時代の思い出の宿る故郷である。「平城の明日香」は題詞の元興寺のことである。この寺は藤原京にあった法興寺を移した寺であり、その地を思い出させる場所である。建物の移築は建築史上の様々な議論とも絡み想像力の飛翔のみではすまされないが、この寺が古都を懐古させる空間であり、それはまた少女時代の故郷を懐かしくさせる空間であるとの想像は許されよう。

遷都は、飛鳥時代にあつては、珍しい体験ではなかった。坂上郎女の最も早い生年推定は持統天皇三年（六八九）であり、そうであれば幼女の頃に飛鳥浄御原京から藤原京への遷都も体験していることになる。個人の生活史の中で稀な体験ではなく、古都を故郷とする人々は少なかつたのである。場合によつては何度かそれを体験することも有り得たのである。「ふ

るさと」という言葉は、こうした中で育まれて来た言葉であつた。

和銅三年（七一〇）の平城遷都は、恒久的な都城の建設を目的としたものであつた。しかし、延暦三年（七八四）山城長岡に遷都されるまでの間にも、短期間ながらも都が遷される事態はあり、奈良の地が「ふるさと」となることがあつた。『万葉集』にはそのことがしつかりと詠い残され、遷都という出来事は具体的な体験として歌人達にも保持され続けた。巻六には、聖武天皇の天平十二年（七四〇）十二月に行われた山城国久邇京への都遷りにまつわる歌が載せられている。中でも「田辺福麻呂歌集の中に出づ」とする「奈良の故郷を悲しびて作る歌一首」は印象的である。四年の間の遷都ではあつたが、奈良は「ふるさと」となるのである。

やすみしし 我が大君の 高敷かす 大和の国は 皇祖
の 神の御代より 敷きませる 国にしあれば 生れま
さむ 御子継ぎ継ぎ 天の下 知らしまさむと 八百万
千年をかさね 定めけむ 奈良の都は かぎろひの 春
にしなれば 春日山 三笠の野辺に 桜花 木の暗隠り
かほ鳥は 間なくしば鳴く 露霜の 秋さり来れば 生
駒山 飛火が岡に 萩の枝を しがらみ散らし さ雄鹿
は 妻呼びとよむ 山見れば 里も住み良し もののふ
の 八十伴の緒の うちはへて 思へりしくは 天地の
寄り合ひの極み 万代に 栄え行かむと 思へりし 大
宮すらを 頼めりし 奈良の都を 新あた世の 事にしあ
れば 大宮の 引きのまにまに 春花の うつろひ変は

群鳥の 朝立ち行けば さすたけの 大宮人の 踏み
平らし 通ひし道は 馬も行かず 人も行かねば 荒れ
にけるかも

反歌二首

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり
なつきにし奈良の都の荒れ行けば出で立つごとに嘆きし
増さる

導入部では、国家の権威を印象付けるようなやや定型的な麗句でもって、平城京が永遠の都城として定められたことが歌われる。都は国家の意志を体現させる空間なのだが、中盤部では、そこが、自然の豊かな景物とともに営まれる、人々の感情生活の空間でもあることが印象付けられる。終盤部では、そうした土地が天皇の意志により廃され、新たな土地へ移されて行く様が歌われる。そして、二首の反歌では、「ふるさと」となつてしまった奈良の地が荒廃に向かって行くことが悲しまれる。「ふるさと」とは、通う人が無くなつて道を草がおおい、かつての栄華の跡が荒れ果ててしまった悲しい空間だということ詠み込む。

そして、その空間は、かつて生活があつた故に懐かしくてならない場所であることは、この遷都を詠んだ一連の歌群の中にある高丘河内連の

故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひそ我がせしにも明らかであろう。久邇京は奈良北方の低山の向こう側であり、まさに「遠くもあらず」なのだが、その地に遷り思う奈良は、限りなく懐かしい距離が生じてしまった空間なのである。

「故郷」、「ふるさと」は、遷都という出来事の中で、『万葉集』

ではこのように育まれてきた言葉であつた。

二 遷都が遠くなりつつある中で — 『古今和歌集』の「故郷」 —

紀貫之の歌⁵

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほにけるは『百人一首』にも入る有名な一首であるが、『古今和歌集』春歌上では次の詞書を付している。

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、程経て後に至れりければ、かの家の主、かく定かになむ宿りはあると、言ひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りて詠める

したがって、舞台は初瀬であり、何度も宿り馴染みのある地であるから「ふるさと」なのだと解されて来た。しかし、『古今和歌集』の他の歌の詞書からも初瀬の観音へ詣でる場合、奈良が途上の宿泊地である中宿りとされていることに注目し、この「宿」は奈良ではないかと論定した吉海直人の論がある⁶。さらに、その論では、梅花と初瀬の結び付きは稀薄で、「むしろ「故郷・花（梅）・匂ふ」は、疑いなく旧都奈良のイメージであつた」として、

ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり

の『古今和歌集』春歌下・平城天皇の歌を引く。また、同じ集の冬歌・坂上是則の

奈良の京にまかれりける時に、宿れりける所にてよめる

み吉野の山の白雪つもるらし古里寒くなりまさるらむ
を引き、詞書が無ければ「古里」が吉野と詠まれる可能性を指摘するのも示唆的だろう。

これは卓論だと思う。初瀬は大和国であり、古都の範囲に含められるようにも思えるが、観音信仰の中心地として、独特な地帯として捉えられていたと考えるのが妥当であろう。宿が奈良の地であれば、まぎれもない古都である。「ふるさと」の語は何よりも古都を第一に意識する言葉であることが、ここでも確認できよう。

『古今和歌集』の歌の中では、十二例の「ふるさと」の用例が見られる。二例を除いてこの語は古都を表わし、具体的には奈良の地を指していると考えてよいであろう。例外の二例について見ると、雑歌下、紀友則の

筑紫に侍りける時に、まかり通ひつつ、碁打ちける人
のもとに、京に帰へりまうで来て、遣はしける

ふる里は見しごとあらず斧の柄のくちし所ぞ恋しかりける

は、明らかに京都を指している。晋の王質が山中の仙童が碁を打つのを見るうち斧の柄が朽ちてしまったという故事を引き、いささかオーバーな表現を取って不在のうちに自分には馴染みのない世界になった京都を詠んでいる。「ふる里」の語にも古都のイメージを背にした諧謔的な意図での選択があるかもしれないが、実質的にはそこと関係のない場所を指している。夏歌、壬生忠峯の

はやく住みける所にて、郭公の鳴きけるを聞きてよめる
昔へや今もこひしき時鳥ふるさとにしも鳴きて来つらむ

でも、昔住んだ場所が奈良とは考えられず、やはり昔なじみの所であろう。現代語の故郷に近い意味の用法が、すでに遷都とは関係なくこの時代にも併存していたことも知られるのである。

卷十九所収の「冬の長歌」と題する凡河内躬恒の長歌には、「古る里の吉野の山の」という表現が見える。先の吉海論で引かれた是則の「古里寒くなりまさるなり」や、冬歌、読人不知の

ふるさととは吉野の山し近ければ一日も雪の降らぬ日はなし

を考えれば、吉野山は奈良の季節感と密接な地であり、一体的に「ふるさと」に含まれる空間と見てもよいだろう。

他の作品については、「ふるさと」は古都であり、奈良の地をそのまま指しているのだが、遷都からすでに百年以上を経た『古今和歌集』の中で、古都奈良はどのような土地であるかは一筋縄ではない。例えば吉海論で引かれていた平城天皇の歌では「ふるさととなりにし奈良の都」とはつきりと規定し「色はかはらず花は咲きけり」と、「年々歳々花相似、歳々年々人不同」という名句をそのまま体現するような空間が示される。人に関わる物はすべて変わり、自然だけが残るといふ、その空間の典型的なあり方が示されている。しかし、作者のプロフィールは、奈良がもつと生臭い空間であることを知らしめる。平城天皇は平安京に遷都した桓武天皇を継いだが、病を得て弟の嵯峨天皇に譲位し上皇となった。しかし重祚を謀り、奈良に再遷都し、そこを拠点に自らの世系に皇権を取り戻そうとしたのが弘仁元年（八一〇）薬子の乱であった。『古今和歌集』でもそ

の古い層では、「ふるさと」奈良は、こうした動きをもまだ可能にさせる場所であつた⁷。

この歌集の古層に属する歌としては、読人不知の作品群もそうだと想定される。「ふるさと」の詠み込まれる作品についても、夏歌、

時鳥鳴く声きけばわかれにし古里さへぞ恋しかりける

の三句目の「わかれにし」の直接体験を叙述する助動詞「き」は、奈良からの遷都による別れを内在させた回想であろう。また、秋歌上の、

君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫の音ぞかなしかりける

で「松虫」に「待つ」の掛詞で詠み込まれる、古都で、来なくなつてしまった恋人を待つ女の姿も、イメージだけのものではない。古都には新都に行かずに取り残された女もいるのだという現実を、この表現の背後に考えてよいであろう。『万葉集』以来の生活の拠点が大きく変わる出来事としての遷都体験の連続性は大きいと見てよいだろう。

「ふるさと」の作例中には「ふるさと人」というのがある。春歌下、惟喬親王の歌である。

僧正遍照によりて贈りける

桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の来ても見なくに

親王が遍照に対して、我が家の桜などは見に来てくれないだろうとすねてみせた作だが、遍照が「ふるさと人」と呼ばれる理由を新日本古典文学大系では「昔なじみ」故だとする。しかし、遍照は奈良に縁の深い人物であり、それ故にそう呼ばれていた

のであろう⁸。

遍照は六歌仙の一人、俗名は良峯宗貞であり、生年は弘仁七年（八一六）で、遷都から二十年ほどしか経っていない。彼の母は奈良の石上に住んでいて、それはかなり有名だったようである。『古今和歌集』秋歌上巻軸には、

仁和帝、親王におはしましける時、布留の滝を御覧ぜむとおはしける道に、遍照が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野に作りて、御物語のついでに、よみて奉りける

僧正遍照

里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる仁和帝光孝天皇が皇子であつた時代に布留の滝見物の途上にそこを訪ねている。遍照達も趣向を凝らして迎えたらしい。庭を秋の野に作るのも、荒廃した風情をかもそうとする作庭ではなかったか。歌にも見えるように、古都は人が去り荒れてしまった中に、取り残された人がひっそりと住むべき時空であり、それこそが魅力とすでに理解されていたのだろう。遍照はまた雑歌下に、

奈良へまかりける時に、荒れたる家に、女の琴弾きけるを聞きて、詠みて入れたりける

わび人の住むべき宿と見るなへに嘆き加はる琴の音ぞするのような作品も残している。古都の地にひっそりと住む女性を見出し歌を贈る様は、『伊勢物語』冒頭と重なることは言うまでもない。

「ふるさと」である奈良は古都の地として独特のイメージをすでに作り上げているようだが、いまだ歴史の彼方の空間というのではない。遍照が奈良で生まれたかはわからないが、母は

その地の人でそこに住み、彼自身もその地との関わりは大きかったのである。

遍照の子である素性も奈良石上良因院に住んだ人であった。彼は夏歌に

奈良の石上寺にて郭公の鳴くをよめる

石上のふるき都の郭公声ばかりこそ昔なりけれ

という印象的な古都詠を残している。平安時代になっても、「ふるさと」奈良は、父母の、祖父母の生活の地としての地縁は残り続けるのである。

撰者達の同時代に鮮やかな活躍をした女流歌人が伊勢である。彼女には、恋歌四、

ふるさとにあらぬものかな我がために人の心のあれて見ゆらむ

のように、自分から離れて行く相手の心を、古都の荒廃に比した作がある。この伊勢も奈良の生まれであったのかもしれない。少なくともその母は奈良に住み続けていたらしく、母を亡くした後、その旧居を訪ねた感慨が『後撰和歌集』哀傷に載せられている。

大和に侍りける母身まかりて後、かの国へまかるとて

ひとりゆく事こそうけれふるさとの奈良のならびて見し人もなし

伊勢にとつては、「ふるさと」奈良は古都であるとともに、母との生活の思い出の刻まれた故郷でもあったのである。遷都後百年というのは、意外に長い時間ではなかったのかもしれない。

三 歌題「故郷」

千年の都といった、都は京都から遷ることがないものという觀念がどのように形成されて行つたかは捉え難いのだが、次第にその実質が現実として定着してきた。そうした平安時代の連続の中で、「ふるさと」も一定の和歌的な主題を担う言葉として詠まれ続けていった。やがてそれが整理され和歌に詠まれるべき主題として歌題として確立する。

歌題という言葉は、むしろ現代的な術語であり、本来は「題」であるが、題と言つた場合、早くからそれを詠み込むための作法も伴つて確立した漢詩の題と混同する。歌題の発生は詩題と密接に関係し、歌題も漢字で書かれる。しかし漢字表記されても漢語とは限らない。歌題としては「故郷」という形だが、中国的意味の漢語ではなく、あくまで「ふるさと」の漢字表記である。歌題の成立は、起源まで遡れば万葉時代まで至れるかもしれないが、確立と盛行ということでは、十二世紀あたりを考へればよいのだろう。そこに至るまでの過程で、主題により整理された類題の形で編纂された集である『古今和歌六帖』『和漢朗詠集』の役割は大きい。

十世紀半ばに編纂された『古今和歌六帖』の第二帖には「ふるさと」の主題が立てられている。「都」というカテゴリーに對置するように立てられた「田舎」という大項目の下位に、「くに・こほり・さと・ふるさと・やど・やどり・かきほ」として、その一つとして並べられている。「都」は「みやこ・みやこどり・もしき」と細分される。古い都として「都」のカテゴリーに入れられそうであるが、「田舎」に入るのは注目されよう。貴

族の日常の生活圏からは異境である。

作品は五首引かれるが、『古今和歌集』春歌下に読人不知として載る

駒なべていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ

を最初に、貫之歌・伊勢歌と続く。

見しごとあらずもあるかなふるさとは花の色のみぞあせずありける

散り散らず聞かまほしきをふるさとの花見て帰へる人もあはなむ

後の歌で花が散ったかを尋ねる伊勢にとつて、「ふるさと」である奈良がどのような地であつたかは改めて述べるまでもない。貫之の「見しごと」の自己体験としての回想は、やや虚構めいているが、遷都がそれほど遙かな過去ではないという時代感覚を伝えていよう。三首ともに「ふるさと」は時間的にも心理距離としても遠い所にはないといえよう。作品の詠作の時代も古今時代であり、当然ながら前節に見てきた「ふるさと」意識である。

四首目の藤原興風の

来つつのみ鳴くうぐひすのふるさとは散りにし梅の花にざりける

は鶯を擬人化し、ほとんど現代語の故郷の意味に近いようだが、「梅の花」が「散りにし」と捉えられている所には注意すべきであろう。古都と同様に盛りのものが時を経て荒れた場所であることが意識されるのである。

最後の敦実親王の歌

ひとりのみながめて年をふる里の荒れたる様をいかに見るらん

は、『後撰和歌集』雑一にも収められ、そこでの詞書で事情が明らかである。「京極御息所、尼になりて戒受けむとて、仁和寺にわたり侍りければ」というものである。宇多法皇由縁の仁和寺ですでに僧籍にある敦実のもとに、法皇の妃であつた御息所が受戒に来るという場面である。父・夫の由縁の場を「ふる里」とするのは現代語にも近いようだが、やはり法皇が没して「荒れたる様」が詠まれているのには注目されよう。

『古今和歌六帖』での「ふるさと」は古都には限らないものの、その言葉で示される空間は、かなりはつきりとしたイメージをすでに結んでいるであろう。忘れられ荒れて行く場所である。

『和漢朗詠集』は十一世紀を迎えた頃の時代の趣味を代表する漢詩句と和歌の集である。漢詩との関係で「ふるさと」という語との直接的な関係が捉えにくくなるが、「古京（故京）」がそれに当たるであろう。漢詩句が一对と和歌が一首引かれる。

緑草ハ如今ノ麋鹿ノ苑 紅花ハ定メテ昔ノ管絃ノ家ナラム

いそのかみ古き都を来てみれば昔かざしし花咲きにけり

漢詩句は十世紀の詩人菅三品菅原文時の詩の一節だが、人の営みが絶え自然がその跡を覆っているというイメージである。景物なども現代に近い形で奈良を想起させる。和歌は作者は記されていない。『新古今和歌集』でも読人不知として再録するが、『中務集』にも見える。それによると村上天皇時代の「国々の名ある所」の屏風歌となつている（場所は「いそのかみ」）。「昔かざしし」は直接体験の表現となつている。しかし、この表現の背後にはすでに山部赤人の作品とされていた「ももしきの大

宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮らしつ」という人口に膾炙した歌の存在を考えるべきだろう。遷都の体験が古歌により文証化・間接化している様を見てよいだろう。作中の主人公は古歌の時代の人である。

「故郷」が歌会で歌題として詠まれた早い例に、『能因法師集』の「長楽寺にて人々故郷の霞の心をよむ中に」という一連の作がある。十一世紀半ばまでの時期に、東山の眺望の開けた山寺での会である。能因自身の

よそにてぞ霞たなびく故郷の都の春は見るべかりける

以下、鴨川を越えて離れて来た眼下の洛中を「故郷」と詠んでいる作品が続く。離れてきた俗界を「ふるさと」と認識するのは新しい展開であろう。長楽寺は当時の漢詩人が集う漢詩的な特別な文学空間であつた⁹。ここでの歌会もやや特別な位相を考えるべきであろう。興味深い例であるがこのような「ふるさと」はほとんど継承されない。

歌題の盛行は十二世紀を迎えるころからであろうが、永久四年（一一一六）の『永久百首』は百題の歌題で詠まれた百首歌の一つである。その一題に「故郷」があり七人の歌人が詠んでいる。多くは、人の往還がすでに絶えて久しくなりすっかり荒れ果ててしまった空間としての「ふるさと」が詠まれている。遷都というはるか歴史の彼方の出来事ですっかり廃都となつた空間が捉えられているといえよう。そうした空間のイメージが「故郷」という題でほぼ共有されている。

その中でも次の源兼昌の歌は注目される。

佐保殿のさかゆる見ればかげふれて古郷とこそおぼえざりけれ

「故郷」には隆盛を思わせる建物は不似合いであるということ、その空間の特性が際だつということでは、他の歌ともイメージは共有されている。しかし、佐保殿という存在には注目させられる。これは奈良における藤原氏の宿舎的な存在であり、佐保山の麓の藤原房前の奈良時代の邸宅を継承したものであつたようである。この時代にはその宿舎が偉容を誇っていたようである。

古都となつた現実の奈良は、考えてみれば、廃都としてうち捨てられた空間では必ずしもなかった。そこには東大寺・興福寺をはじめ大寺が残り、寺院を中心に様々な宮みが続ぎ、宗教的のみならず世俗的な力も保持されている場であつた。それだけに人々の行き来も頻繁であり、佐保殿のような建物の殷賑も想像される。この時期には大江親通による奈良巡礼記である『七大寺日記』『七大寺巡礼私記』も残されている。荒れ果てた空間としてのイメージが定着して行く「ふるさと」と必ずしも現実の奈良とは重ならないであろう¹⁰。

八重葎へだてつつふる故郷にいづくぞとだにとふ人もなし
(源顕仲)

鎖しながらまだ斧の柄も朽ちなくにまがきも聞もあらぬ
里かな
(藤原仲実)

よもぎ分けたづねぞ来ぬる古郷は花橘の香をしるべにて
(大進)

等のこの百首での世界は、かなりに観念化された空間が捉えられているといえるべきだろう。歌題としてイメージが共有される「ふるさと」である。

四 中世から近世へ

中世が始まろうとする源平時代の最中、治承四年（一一八〇）六月に、四百年ぶりの遷都が平清盛の手により断行された。ほとんど体制も整わないままに安徳天皇以下は福原の新都に遷り、京都は「ふるさと」となった。

旧都となった京都の様子は『平家物語』の諸本も印象的に語っている。主上がその地を離れるや、たちまち「荒れ行く」土地となっている。巻五に載せられた西園寺実定の手になると思われる今様によれば、

古き都を来てみれば 浅茅が原とぞ荒れにける 月の光
は限なくて 秋風のみぞ 身にはしむ

と、まさに「ふるさと」として人々にイメージされる空間が京都に現出している。

旧都に残された人々も少なからず居て、世に受け入れられない無聊の日々をそこで送るのだが、その一人に十九歳の藤原定家がいた。この青年が日記『明月記』の九月の条に「紅旗征戎非吾事」と書き付けたのはあまりにも有名だが、その次に記された十五日の条もよく知られている。夜空に現れた光る物、流星の如き物の破裂する様子を印象的に描く。その条の書き出しは、

入リ^レ夜ニ明月蒼然タリ、故郷寂ニ而^テ不^レ聞カニ車馬之声ヲ一、
歩縦容ニ而^テ遊ブニ六条院辺ニ一

というものであり、思いがけずも「故郷」となった洛中の物寂しい風情に酔うような夜散歩の最中であつた。

すでに歴史の彼方の経験でしかない遷都を人々は体験する

ことになったのである。「ふるさと」「故郷」は半信半疑ながらも、まさに京都の土地であつた。

この遷都は結局は失敗に終わり、十二月には再び京都に都が戻つた。幻に近いとはいえ現実にはそうした体験を人々に刻印した。そしてさらに、年末の二十八日には久しく「ふるさと」を代表とする土地である奈良で大きな事件が起こつた。平重衡の軍勢の手による南都焼き討ちである。東大寺・興福寺が壊滅し、人々に大きな衝撃を与えた。また、その後の大寺の復興事業は、中世初頭の大文化事業として、人々の関心を南都に誘い続けた。中世始発期のこの年は「ふるさと」という言葉の周りで二つの大きな出来事があつたことになる。

こうした時代の影響は、すぐ後に撰ばれた『千載和歌集』よりもむしろ次の『新古今和歌集』において顕著であろう。なぜなら、活発に展開した同時代の詠歌活動の集約という性格がより明白に見られるからである。その活動の中心にいたのが十九歳で遷都を経験した藤原定家とその父俊成であつた。そして彼等を統括する後鳥羽院は、ちょうどその年に生まれた。

何度となく開かれた彼等の時代の歌会では、しばしば「故郷」が歌題となる。建仁二年（一二〇二）九月十三夜に催された水無瀬恋十五首歌合では、「故郷恋」が出題される。この題は様々な展開の可能性を持ち、実際にそのように詠まれるが、「恋」という人の生の時間内の物語を、「故郷」という何代もの時間の経過を含む空間との関連で実現させる。比喩的な詠み方ではなく、「故郷」を舞台として選べば、遷都を体験した作中人物を設けることになろう。福原遷都という時代の体験は生きる可能性を持つ。

しかし、例えば、俊成卿女は、

飛ぶ鳥の飛鳥の里に秋深けて出でにし人はおとづれもせで
と、すでに引いた元明天皇の『万葉集』の歌、

飛ぶ鳥のあすかの里を出でていなば君があたりは見えず
かもあらん

を本歌取の手法により取り込み、その世界を後日譚のように展開させる。元明天皇は女帝であるが、遷都によつて新都に行つてしまった男に忘れられた古都の女の姿を仮想し、その作中人物が物思いを深める秋の抒情を形成する。

後鳥羽院の作品、

里はあれぬ尾上の宮のおのづから待ちこし宵も昔なりけり
も『万葉集』の大原今城の

高円の尾上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや
を本歌に、巻二十の一連の「依興各思高円離宮処」を背景に、聖武天皇の離宮を歌い、その時代を幻視するように再現させ、聖武没後に離宮に残された宮女の嘆きを歌う作品である¹¹⁾。

むしろ、この時代は、こうした古歌の世界に立脚して、世界を構築して行くような詠歌のあり方が時代の方法であった。古典の世界が共通の資産と意識され、その世界の出来事も歌に詠まれる素材であった。そうした世界に目を向ける、特に奈良時代や聖武の時代に目を向ける原因として南都炎上復興は力となったと思われる。しかし、福原遷都というような体験は直接的で切実なものではあつても、必ずしも彼等の創作の根拠となるような体験ではなかつたのであろう。

そもそも後鳥羽院はその年の生まれであり、俊成卿女は十歳前後で迎えた体験であつた。先に『明月記』を引いた定家とは

異なる。しかし、その定家歌は、

つれなきを待つとせし間の春の草くちぬ心のふるさとの霜
というものである。この歌人らしく難解である。歌合の判詞でも「くちぬ心などいかに言へるか心得ず侍り」と評されている。この歌は『古今和歌集』恋歌五の遍照の作、

我が宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせ
しまに

を本歌とする。通つてこなくなった人を待つ間に荒れて行く古都の風景を、春の草が朽ちて行く様に象徴させる。自然に枯れて行くのではなく、朽ちさせて行く「霜」を「ふるさとの霜」として、古都である故をさらに細かな景物に象徴させるといふ、高い抽象度を持った作品に仕上げている。忘れられ荒れて行く世界という、和歌が伝統的に観念化してきた世界の象徴的表現ということでは、現実には直面した十九歳の体験はほんの痕跡以上には持ち込む余地はないのである。

すでに中世初頭において、和歌表現は古典的蓄積を規範とする他からの影響を受けにくい閉じられた自律的な世界を形成している。「ふるさと」「故郷」という語も同様である。かつて遷都が国家的な体験であるとともに個人的な家族的な体験である故に含み持ち得た二重の含意、古都という異境が懐かしいかつての生活の地という弁証法的であつたかもしれない可能性は、忘れ去られ荒れて行く土地というイメージの中に、歴史的蓄積という形で収斂する。古歌という文証の再生という形で蘇る世界として蓄積される。

すでに鎌倉には幕府が作られ、中心は京都という都のみではなくなくなっている。社会の変化は中世から近世へかけて間断なく

進んで行く。社会の中心は変化して行き、歌人にしても都で生まれ、都に常に視点を置き続けるという人々では必ずしもなくなつて行く。そうした中でも「ふるさと」「故郷」は変質しない。古都の地が原則であり、その忘れ去られ荒れて行くイメージに該当する場が付随的にこの言葉で捉えられ続ける。現代語のよ

うな懐かしむ空間である故郷は引き寄せられない。

他のジャンルに目を向ければ、松尾芭蕉にはすでに、

秋十とせかへつて江戸を指す古郷
の吟がある。貞享元年（一六八四）、現代語の故郷である伊賀上野を含む関西への旅に際しての旅立ちの句である。そこでの「古郷」の語に込めた思いは現代語とほぼ等しかろう。田舎から上京して生活するという近現代とも相似な社会体制がすでに背景としてある以上当然とも言えよう。むしろ生地との絆はより強いかもしれない。

和歌に戻るならば、

吉野山けふさへ雪のふる里も木毎の花の春は来にけり
物思へばいとどかなしなふる里の奈良の飛鳥の秋の夜の月
ふるさととなりにし宿を来てみれば涙とともに降る木の葉
かな

以上三首は、安政七年（一八六〇）刊の『大江戸倭歌集』から抜き出した歌である。江戸の人々の歌を集めた歌集であるが、撰津守内藤政成・長門守長常・伊藤総丸をそれぞれ作者とする。武家とその周辺の人である。十九世紀中葉のこれらの作品が、中世初頭どころか平安時代とも通じる様は瞭然であろう。和歌表現の世界での「ふるさと」という言葉の保守的な位相がよく見て取れるであろう。

おわりに

会津八一『鹿鳴集』には次の一首が載る¹²。

高円山をのぞみて

あきはぎはそでははすらじふるさとにゆきてしめさむい
もあらなくに

高円山は先に見たように聖武離宮尾上宮に他ならない。そこは秋萩の名所でもあり、『万葉集』巻一九の

宮人の袖付け衣秋萩にほひよろしき高円の宮

を八一の歌も受けている。その意味では古典的な作品だが、「ふるさと」は八一の故郷新潟である。そもそも初出は『新潟新聞』大正二年（一九一三）七月一八日の「落日庵抄」であり、『鹿鳴集』には七月一四日付けの同じ初出の

奈良にて

いにしへのならのみやびといまあらばこしのえみしとあ
をことなきむ

も載せる「こしのえみし」こそは自らであり、「こし」こそが「ふるさと」である。無論そこは人の営みが遷り荒に帰した地ではない。八一が詠む「ふるさと」は現代語の故郷以外の何物でもない。

異境として憧憬される古都と、懐かしい地として偲ばれる故郷との双方の意味を古典語「故郷」は持ち得るとすれば、それ自体が現代の眼からすれば弁証法的であるかもしれないということと考えはじめた。遷都の体験をめぐりその根は存在した。しかし、その体験の歴史化・観念化が進み、和歌が規範化される道程の中で、古都とその心象へと閉じられて行く。規範

の力学は近世の社会変化の中でも変わらず、近代が来ると一変する。むしろここまで来れば^{ディアレクシス}弁証法的な関係は、その変化の力となった漢語「故郷」や独逸語「Heimat」やそれに変わる欧州語との間なのかもしれない。そのあたりへの射程をもにらみながら、今回は擱筆したい。

注

(1) 漢語「故郷」は『大漢和辞典』によれば「自分が生まれた邑里。ふるさと。郷里。郷国。」と規定されるが、中国社会のあり方と絡めてかなり複雑な位相が予想される。ここでは必要以上の言及はさけない。

(2) 私もかつてこのことを何度か論じたことがあるが、最近のものとして、『古寺巡礼の近代』と題した和歌文学大系『海やまのあひだ／鹿鳴集』（明治書院・二〇〇五年）の月報の小文がある。

(3) このことはすでに辞典項目としては述べたことがある。久保田淳・馬場あき子編、村尾誠一・渡部泰明・山田洋嗣編集委員『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・一九九九年）の「故郷」の項。本稿はそこで述べたことの大幅な増補でもある。

(4) 以下『万葉集』からの引用は小学館日本古典文学全集に拠るが、漢字表記については、より原文に近い形に戻した場合がある。

(5) 『万葉集』以外の和歌の引用は、特に断らないかぎり、八代集は岩波新日本古典文学大系所収の書目により、他は『新編国歌大観』による。表記については適宜読みやすい形にした。

(6) 吉海直人「貫之「人はいさ」歌の宿はどこか」（『解釈』四六巻九・十号・二〇〇〇年十月）

(7) このことと、その孫にあたる在原業平を主人公とする『伊勢物語』が、元服した彼が奈良へ行くことで始まることは、無縁ではないと考える。

(8) 遍照とその子素性との奈良との関係については、帝塚山短大日本文芸

研究室編『奈良の文学』（和泉書院・一九八八年）所収の田中登「遍照・素性と石上」に詳しい。

(9) 例えば『本朝無題詩』には、この寺での度重なる詩会での作品が見られる。このあたりの問題は、川村晃生『撰関期和歌史の研究』（三弥井書店・一九九一年）でも論じられている。

(10) 奈良の地が古寺のある空間であることは言うまでもないが、和歌表現史の中では古寺の風景が詠まれることは極めて稀である。親通の著作には美術巡礼的な視点はすでに見られる。それだけになぜ古典和歌が古寺を詠まないかは問題であるが、いずれ考えてみたい。

(11) この作品についてはすでに「古都と和歌」（犬養廉編『古典和歌論叢』明治書院・一九八八年）で述べた。また、「建仁二年の後鳥羽院―歌風形成から中世和歌へ―」（『東京外国語大学論集』七二号・近刊）でもこの作品の形成について述べた。

(12) 『鹿鳴集』の本文は前掲和歌文学大系による。